Title: 新報4635号.ec7 Page: 1 Date: 2013/08/06 Tue 11:59:49

教団新報

定 価 1部140円(本体133円〒共200円)
予約購読料 1年分 〒共 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140―9―145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話 03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志

献金推進運動の歌を歌う青年たち、今年の四国教区総会で

四国教区の自立連帯献金運動

献金運動推進の歌が誕生

信徒たちの祈りから始まった

伝道の中心的課題 ―教師謝儀

一九五三年九月の「全国宣教協議会」に参加した四国教区の信徒が、日本伝道の中心的課題は「教師謝儀問題」だとの趣旨の発言に、強い印象を受けて戻って参りました。その信徒を中心として、一九五八年四月。第16回教区総会で「教師謝儀の最低基準確保に関する件」の発議がなされました。これが契機となり、教区の様々の場で「教師謝儀問題」が議論される事となったのです。実際当時の牧師家族の生活は厳しいもので、こんな話が残っています。信徒の方が牧師館を訪問した時、牧師夫人が寝ておられます。「どこかお悪いのですか?」と尋ねると、「動きますとお腹がすくものですから」と答えられたとか。涙無しには聞く事の出来ない話であります。

一九六〇年。第11回教団総会での事。その閉会まぎわ、大阪の信徒議員から、「宣教のために大きな事をしよう!」と、「十億献金」の提案がなされ、議場に大きな拍手がわき起こりました。一九六二年の第12回教団総会（大村勇議長の時）において、具体的な計画が承認され、集められた献金は伝道のため・教師の謝儀・謝恩のために用いられることが決まりました。

日々聖書を読み 祈って捧げる

その総会の帰路の事。四国教区からの議員たちは、列車・船を乗り継ぎ戻って参りましたが、四国の列車は満員。座席はありません。やむをえず通路に新聞紙を敷いて寝ようとします。しかしなかなか寝付けません。眠れぬまま大村議長の訴えを考え続けたのです。そして「毎日聖書を読んで、祈って五円を捧げる。それが月一五〇円となる。四国教区内の信徒がみんなでこのことに励めば、四国の責任を果たす事が出来る」との思いが与えられました。当時の五円は、今日の五〇円に当たります。

信徒の方々の 献身的な働き

このようにして、四国教区の「十億献金運動」が始まりました。運動はもっぱら信徒の手で進められました。信徒の方々が各教会を回り、趣意書を配り献金の重要性を訴え、「描かれている線を切り取ると献金箱が作れます」と書かれた厚紙を配りました。さらに関連事務を受け持って下さった方は、送られて来た振替用紙を感謝の祈りをもって開封し、感謝の返事を書き続けました。最初この運動に対し批判的であった教職・信徒の方々も、次第に心揺すられて運動の火は教区内の諸教会に飛び火しました。一九六三年度の「十億献金」の結果は、目標額を遥かに超え、三六二パーセントの成績を上げる事が出来ました。一九六六年には二四四万円が十億献金として捧げられ、その中から一〇〇万円を教団に捧げます。その残額に経常会計からの補助を加え一八〇万円として、二〇の教会の謝儀の互助として用いられました。これが四国教区の「互助」の始まりであります。この献金が一九七八年度には一〇〇〇万円を越え、二〇〇〇年度には二五〇〇万円となり、教区負担金を上回って捧げられるようになりました。

四〇数年の 運動の実り

自立連帯献金運動の四〇数年の歩みを振り返るとき、感謝の思いに満たされます。この運動によって、教師の謝儀の問題が、教会の宣教の課題として受け止められ、教区の諸教会の中に宣教の課題を共有する信頼関係が育てられて来たからです。それぞれの教会が立てられた地の伝道の責任を自覚し（自立）、その教会が必要な協力を進めて行く（連帯）。

この「自立」と「連帯」の精神と、「四国の宣教は、四国のみんなで」の合言葉によって運動は進められ、諸教会の伝道の意欲は高められました。また厳しい伝道の最先端に立たされている小さな群れも、その一つひとつが神にとってかけがえの無い教会であることが確認されました。さらに、この自立連帯献金の運動は、諸教会の伝道を具体的に支える色々の制度を生み出しました。「長期集中伝道応援制度」「互助融資制度」「土地、会堂、牧師館融資援助制度」さらには「建築援護費」などがそれであります。さらには、中高生・青年の集会を継続して開催し、縦横の繋がりを育てる事が出来ました。また、婦人たちの群れは、諸教会の会堂建築のために、物品販売などを地道に続け、数多くの会堂建築の事業に貢献しました。

もう一度 最初から

しかし、今日、四国教区も他教区同様、その教会の経済状態は厳しく、信徒の高齢化、伝道の不振などで、互助を希望する教会が増え、それらを支える献金が思うようには集まらないのが現状です。

そこで、互助全般につき、根本的検討が求められています。しかし、考えてみますと問題の無かった時代はなく、四〇数年の間にも、同様な危機は何度も体験して来ており、その度に悩み、激しく議論し、また祈り、そのところを乗り越えさせていただいて来ました。

そして今、改めて知らされていますことは、もう一度、御言葉を読み、諸教会のために祈り、捧げて行くという出発点に戻る事が大切だということです。

そこで、教区では二〇〇六年に「祈ろう四国教区」という小冊子を発行し、毎週一教会の祈りの課題を覚えて祈ることにしています。

運動の 若い人たちへの継承

そして今、若い人々が動き出しました。教区の二人の青年が（青年を育てて来た方も含みますが）、この自立連帯献金の推進の歌を作詞、作曲して下さったのです。

そして二〇〇七年度の総会の夕食時、各地から自費で駆けつけてくれた青年たちが壇上に昇り、元気にその歌を歌って下さいました（食事代は教区で負担しましたが）。歌は、

「御国仰いで」。

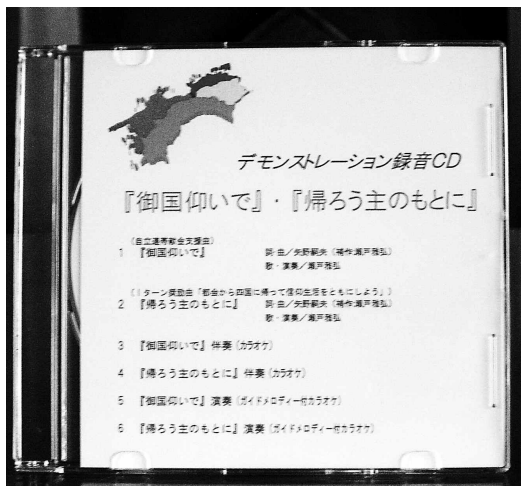
「伝えよう、主の御言葉を。祈り合おう、主の業のため。捧げ合おう、わたしのすべて」。

四国の地に伝道をしたい。その為に共に祈りたい。そして捧げたいと。

もう一曲は、都会に住む人たちに、神が創られた美しの四国で、共に教会生活をしませんかという歌。「帰ろう主のもとに」というものです。二曲とも美しく、歌い易い曲です。この青年たちの自発的な働きは、あの先輩たちの精神を受け継ぐものであります。歌う青年たちの姿に、明るい希望を感じました。

このCDの売り上げは、自立連帯献金として用いられます。

（四国教区総会議長／野村忠則報）



自立連帯献金推進歌ＣＤジャケット

四国教区の各教会に張られているポスター

荒野の声

▼学生時代、殆ど睡眠を取ることの出来ない夜警のバイトを終え、日曜の朝、決まった時間のバスを使う。小学校低学年くらいの子どもが男女四人乗って来る。間もなく、四人による合唱が始まる。大抵は音楽の教科書にもあるような名曲を、美しいハーモニーで聞かせてくれる。今も耳に残る「ボルガの舟歌」。音楽教室に通うものらしい。▼バスに乗り合わせるのが楽しみになった。子どもたちが乗る時間は大体決まっている。選択肢は二本。子どもたちの顔が見えないと今日は外れ、がっかりする。▼ある日、彼らはいつものバス停では下りずに、そのまま乗り続け歌い続けた。その時、運転手の声、「うるさい、他人の迷惑も考えろ」。かなり乱暴な物言いだ。▼「そんなひどい」と思い、他の乗客を見渡す。ところが、大方運転手に同調している。下り際、「いつも楽しく聞いてるよ」と大声で言った。▼その日以来、何故か、二度と子どもたちを見なかった。▼バスは混み、余裕がない。人の心にはもっと余裕がない。

Title: 新報4635号.ec7 Page: 2 Date: 2013/08/06 Tue 11:59:51

『つれもって行こら～ー今からここから ー』

二〇〇七年八月十四～十七日、大阪府和泉市にある日本基督教団いずみ教会を会場にして『つれもって行こら～ー今からここから－』というテーマで第一〇回部落解放青年ゼミナールが行われました。『つれもって行こら～』という言葉は大阪の南西部で語られる泉州弁で『一緒に行こうよ』という意味があります。今年の参加者は四六名、内容が濃いプログラムで充実した学びの時となり、また差別をなくそうと同じ志を持つ仲間との出会いの時となりました。

今年も開会礼拝から始められ、様々なプログラムがありました。「入門講座」では、聞くだけではなく主体的に関わり共に学んでいくことを考え、実行委員が講師を担い、部落差別の歴史や基礎的なことを学びました。「フィールドワーク」では、訪れる場所の説明とその時代背景の説明を事前に受け、部落差別が現実に起きたということを実感しました。また、「信太山盆踊り」への参加は、地域の人とのふれあいがあり、そこで生きる人々の熱気を肌で感じることのできたひとときでした。涙を流しながらも必死に語る姿に心打たれた「笠置隆司さんの講演会」、また、「狭山の時間」では、四四年が過ぎた今でもまだ見えない手錠をかけられ、闘っている石川一雄さん（狭山事件）について学びました。日々の食事からは、地域の食文化を学び、食文化を通して、多くの人々との出会いと、交流の時（焼肉交流会）がもてました。

多くのプログラムの中でも、忘れられない貴重な時間が「Liberation Cup」（リベレーション・カップ）です。この時間は参加者がそれぞれに考えていること、感じていることを皆の前で自由に表現する時間です。つまり、「部落解放運動するにあたり、自分自身も解放していこう」という意図でこのプログラムが生まれ、今年で二回目になります。曲のメッセージ性を伝えるためギターを弾いて熱唱した人、三線やマンドリンを弾いた人、演歌を振り付きで熱唱した人、キング牧師の似顔絵を描いた人、かねこみすずの「みんなちがってみんないい」を腹話術で語った人、「Liberation Cup」の「Liber」（リベル：ラテン語で「自由」の意味）という意味について熱く語った人、今の自分を熱く語った人、それぞれが自由に表現しました。

様々な出会いと学びを振り返りながら、『つれもって行こら～』をもう一度思い起こしつつ、閉会礼拝をもって無事に終わることができました。私は、今年の部落解放青年ゼミナールでたくさんの基礎的な知識を得ることができました。それと同時にたくさんの疑問を持ちました。私は青年ゼミに参加し、またこの文章を書くにあたり、自分が部落差別に対してどれだけ無知なのかを知ることが出来ました。しかし、この無知ということが部落差別に対するこれからの自分の学習意欲になり、様々な差別問題へ取り組んでいく出発点になると思います。

この文章を読んで興味を持った方、来年の部落解放青年ゼミナールに参加して、新たな学びと出会いの時としてみませんか。そして、一緒に差別をなくそうとする運動を起こしていきませんか。それが『今からここから つれもって行こら～』なのです。来年の部落解放青年ゼミナールへの参加をお待ちしています。

（片岡自由報）

第1回韓国協約委員会開催

第35総会期第一回韓国協約委員会が、七月十二日（木）午後、日本キリスト教会館内会議室で行われた。会に先立って内藤留幸新総幹事からの挨拶を受けた。委員の自己紹介の後、委員会組織につき協議の結果、委員長に菅原力氏、書記に吉岡康子氏を選任した。

報告の最初に今総会期に新たに設置された当委員会に関して、設置への経過と扱うべき事項の説明、さらに先に開かれた当委員会の管轄委員会である世界宣教委員会の報告等を担当の上田博子幹事より受けた。

特に、一九六七年に結ばれた日本基督教団と韓国三教会との協約に基づき、過去に開催されてきた日本基督教団と韓国三教団（韓国基督教長老会・大韓イエス教長老会・基督教大韓監理会）による「日韓四教団宣教協議」が一九九七年の第五回宣教委員会開催以後開かれていない事の事情につき詳しい報告を受けた。

議事として、現在準備が進められている第四回スイス・韓国・日本三国教会協議会開催について協議した。これは、スイスのSEK（スイス・プロテスタント教会連合）・ミッション21、韓国の韓国基督教長老会・大韓イエス教長老会と日本基督教団が、過去にスイスと韓国において三回開催してきた協議会の第四回を二〇〇九年又は二〇一〇年に日本でとの開催要請を受けての事である。スイス協約委員会は二〇〇七年六月の委員会において受け入れを決定している。この件に関して、スイスの「ミッション21」と日本基督教団との交流の経過などについての質疑や協議などを重ねた。

その結果、この協議会開催に関する基本事項などを世界宣教委員会において確認することとした。その上で当委員会としてあらためてこの件につき決定し、スイス協約委員会と合同委員会を持ち、今後の協議会開催に向けての準備を進める事等を決定した。

（吉岡康子報）

第4回スイス・韓国・日本三国教会協議会開催等を協議

能登半島地震一五〇〇万円募金開始

第35総会期第二回常議員会（七月九日～十日）で「能登半島地震」被災教会再建支援に関する件が決議された。これをうけて設置された、「能登半島地震」被災教会会堂等再建支援委員会（以下、再建支援委員会という）の第一回委員会が、八月九日、教団会議室で開催された。常議員会で選任された委員は、原田謙、長山信夫、小林眞、大杉弘、津村正敏の五名である。

まず最初に組織会を行い委員で協議の結果、委員長に長山信夫委員、書記に大杉弘委員を選任した。

続いて陪席された中部教区、能登半島地震被災教会再建委員会の小宮山剛委員長より、三月二五日の地震発生後、今日に至るまでの再建委員会の取り組みについての経過、状況の報告を受けた。

更に被災教会の二〇〇七年度の復興計画、それに伴う概算費用、加えて、被災教会再建献金の状況についても報告があった。

次に、高橋潤中部教区議長より、個々の被災教会の現状についての報告があり再建支援委員会の支援を強く要請された。

以後、協議に入り、再建支援委員会の役割について議案に基づく、被災教会等の再建資金として目標一億五千万円の募金を行うことと、それに伴う必要な活動を行うことを確認した。

今後の活動については、募金活動は、八月一日以降の「能登半島地震」被災再建支援に関わる募金は全て再建支援委員会で集約し取り扱うこととする。それ以前の募金については中部教区に一任、対応してもらうことにした。

再建支援委員会の募金の呼びかけ文書（募金趣旨、お願い）を八月中旬に出し、募金活動を具体的に始める。

また、被災教会等の状況など再建支援に関するニュースを九月中に発行することとした。

再建支援委員会として現地の状況の認識を深め、今後の活動に活かして行くために次回委員会は被災地（能登半島）で開催、併せて、被災教会等を問安することにする。

次回再建支援委員会は九月十九日～二十日、被災現地で開催予定。

（津村正敏報）

「能登半島地震」被災教会会堂等再建支援委員会

常議員会に要望書提出

第2回宣教委員会

第35総会期第二回宣教委員会が去る七月十七日（月）～十八日（火）、教団会議室で行われた。川崎善三委員の説教による開会礼拝の後、内藤留幸新総幹事の挨拶を受けた。

また、教団の自主活動団体である全国教会婦人会連合、日本キリスト教保育所同盟、全国教会幼稚園連絡会の挨拶と報告がなされた。

障害者差別問題小委員会の報告を受け、小委員会からの『障がい』を考える委員会」への名称変更の提案を積極的に受けつつ次回に継続審議とした。

宣教方策会議を「日本基督教団の伝道、その協力のために」－プロテスタント伝道一五〇年をふまえて－との主題で二〇〇八年三月十日（月）～十一日（火）、富士見町教会を会場に行うことを決めた。

キリスト教教育主事の制度と歴史について、勝山健一郎教団幹事から詳細な説明を受けた。

常議員会の報告を受け、北村慈郎常議員が、発題に於いて、紅葉坂教会で未受洗者に陪餐させている旨の発言を行ったことにつき、常議員会に要望書を提出することとなった。

以下常議員会宛要望書を記す。

（小出望報）

2007年7月18日

日本基督教団　常議員会　御中

宣教委員会
委員長　高橋　潤

要　望　書

第35総会期宣教委員会は、7月17～18日第2回宣教委員会を開催し、「常議員会報告」として、2007年7月9日常議員会に於いて北村慈郎常議員が「聖餐について」発題した内容について報告を受け、常議員会に、次のように要望いたします。

北村慈郎常議員は、自身が責任を持つ紅葉坂教会における具体的な事例として、未受洗者にも聖餐に与らせるということを自覚的に行っているとの発言をし、その上で教団に於ける「多様性があってもよい」として、未受洗者への配餐をも容認すべきことを求めました。

聖餐は、日本基督教団が守ってきた宣教の秩序の生命線であり、宣教委員会として上記のような北村慈郎常議員の聖餐に関する発言と未受洗者にも聖餐に与らせることを自覚的に行っている事は、容認出来ません。

常議員会は、昨年の信仰職制委員会の答申の通り、北村慈郎常議員の行っている未受洗者への配餐の事実に対し明確な判断と指導を行うよう要望します。　以上

編集部注…上記要望書は、紙面の都合上、レイアウトを変更しています。

Title: 新報4635号.ec7 Page: 3 Date: 2013/08/06 Tue 11:59:54

第2回日本基督教団と在日大韓基督教会との宣教協議会

合意文書

私たち在日大韓基督教会（KCCJ）と日本基督教団（UCCJ）は、2007年7月23日から24日まで、「第2回日本基督教団と在日大韓基督教会との宣教協議会」を、代表48名が参加する中、日本基督教団東梅田教会において開催した。主題「100周年を迎える在日大韓基督教会と日本基督教団の宣教協力の展望」のもと行われた。今回の協議会では、2008年に宣教100周年を迎えるKCCJの歴史やこれまでの両教会の宣教協力の事例に学びつつ、これからの両教会の協力関係のあり方について展望した。また、日本社会の現状、とくに憲法および教育基本法の改定の流れや、在日外国人をめぐる状況を踏まえつつ、共同の宣教課題について協議した。

私たちは、1984年に宣教協約を締結して以来23年間にわたり、個教会、教区・地方会、総会レベルにおいて豊かな交わりが与えられてきたことや、在日コリアンの人権の課題、とくに、外登法の指紋押捺撤廃運動や「外国人住民基本法案」の制定運動といった課題を共に担うことを通して、協約関係の実質化がなされてきたことを確認した。私たちは両教会の交わりを導いてくださった主に深く感謝する。これからの両教会の協力関係をより深化させるために「宣教協力にあたっての指針（1996年12月2日確定）」を確認し、具体化する。私たちは、この時代にあって主の召しに応え、福音宣教に励み、宣教協力をなす。主から与えられた共同の宣教課題を担うために、私たちは以下のことに合意した。

1. 両教会は共にKCCJの宣教100周年を祝い、KCCJの歴史を学び、深める。
   ◎UCCJは、募金活動などによってKCCJの記念事業を積極的に支援する。
   ◎両教会の歴史について、共同で資料収集し、研究を行う。
2. 両教会は、交流をさらに深める。
   ◎KCCJの教会のない地区においては、教区・地方会・地区間において交流を模索し、実践する。
   ◎神学生の夏期伝道などの実習交換を奨励する。
   ◎青少年を含む信徒間の交流を促進する。
3. 両教会は、平和といのちの主に仕える。
   ◎平和憲法を堅持するために祈り、さらに行動する。
   ◎両教会は、「平和メッセージ」を毎年8月に共同で作成し、各教会に発信する。
4. 両教会は、神の国を待ち望むものとして共生社会を目指す。
   ◎両教会は、在日外国人を排斥する言論および行動を批判しつつ、在日外国人に対する理解が深まるように努める。
   ◎両教会は、指紋制度の復活を含む外国人管理制度である「出入国管理および難民認定法」の問題点を共有し、その抜本的改正に向けて行動する。
   ◎両教会は、「外国人住民基本法案」の制定のために働く。個教会レベルでの学習会や国会請願署名運動を積極的に推進する。
5. 今後の課題
   ◎両教会の讃美歌から平和などをテーマとした讃美歌を選出し、韓日対訳の讃美歌集を編纂する。
   ◎「宣教協約の日」を設定し、共同の式文を作成して用いる。
6. 今後の宣教協議会の開催に関しては、宣教協力委員会に委ね、5年以内に開催するように努力する。

2007年7月24日

第2回日本基督教団と在日大韓基督教会との宣教協議会参加者一同

一致と連帯の恵みが聖霊によって

9年ぶりに、KCCJと教団との宣教協議会

東梅田教会で開催、48人参加

第2回在日大韓基督教会（KCCJ）と日本基督教団との宣教協議会が「百周年を迎える在日大韓基督教会と日本基督教団の宣教協力の展望」を主題に、七月二三～二四日、日本基督教団東梅田教会で開催された。（教団二七人、KCCJ二一人、計四八人参加）

今回は、第一回宣教協議会以来九年ぶりの開催で、来年、在日大韓基督教会が宣教百周年を迎えることを覚えての会議となった。開会礼拝において山北宣久議長は、一致と連帯で悩む世界にあって、「聖霊と私たち」には一致と連帯の恵みが聖霊によって与えられていると語られた。両総幹事より両教会の年間活動報告、関東地方会と四国教区から地域交流の報告。来年に迫った在日大韓基督教会の宣教百周年事業についての報告を聞いた。

今協議会の中心となる講演は、在日大韓基督教会歴史編纂委員会李清一（イチョンイル）委員長より「在日大韓基督教会宣教百年の歩み～日本基督教団との関係史をふまえて」と題して行われた。李清一氏は、KCCJの戦前の歩みを丁寧に語られ、「散らされた者への宣教」からはじまり、各地に広がった宣教の歴史にKCCJの歴史的固有性を見る視点を指摘。戦後の歩みは、残された者の使命として、一九六八年宣教六〇周年の在日同胞社会の人間尊厳と人権擁立への取り組み、一九七三年宣教基本政策の採択を説明した。今後の課題としては、一九四〇年日本基督教会への吸収合併以後、日本基督教団への編入（一九四一～四五）についての再検証の必要を指摘された。今後のKCCJの宣教課題六項目と宣教協力への具体的な展望を三項目あげ、共生社会のモデルを目指したいと語られた。

二日目は、小林眞副議長による「憲法・教育基本法の改定のながれについて」と韓聖炫（ソンヒョン）牧師より「在日外国人の人権状況をめぐって」の二つの発題を受けた。全体会では、分団報告と質疑、合意文書の検討がなされた。合意文書は、協議会の議論を踏まえて文書起草委員の責任で確定した。宣教協議会おいて印象的だったことは、この九年間で両教会が牧師の構成や時代的要請によって変化したことだ。そのような変化の中で、一九八四年に結ばれた両教会の「宣教協約」及び一九九六年確定した「宣教協力にあたっての指針」をどのように実質化していくのか、そして、両教会が神から与えられた宣教の使命と責任において一致し連帯していくための道を与えられることを祈りの課題としたいと願う。閉会礼拝では、李聖雨（イソンウ）総会長が「モーセの携帯品」と題して奨励して下さった。（高橋潤報）

目標額まで、もう一歩

第3回「新潟県中越地震」被災教会会堂等再建支援委員会

第三回「新潟県中越地震」被災教会会堂等再建支援委員会が七月十七日に教団会議室で開かれた。

(1)事務局報告

①当初の募金目標額一億五千万円に三千万円を増額し、一億八千万円とすることが七月の常議員会で提案可決された。②六月二八日現在の献金累計額は一六〇、六四七、四〇四円となった。

(2)関東教区報告

飯塚拓也関東教区被災支援センター統括主任から被災五教会の近況と再建の課題および昨日（七月十六日）に発生した「中越沖地震」の報告を受け協議した。

①小出教会　清心保育園の工事を先行させており、教会堂牧師館はその後となる。それまで少数の家族が中心になって魚沼産コシヒカリの販売等による献金活動を進めている。

②十日町教会　牧師館再建は懸案の園庭隣接地を教会債によって取得できたので、そこに七月以降着工の予定。十日町市から受けた義援金の配分は教区支援金としてささげた。

③見附教会　五月末に建築確認申請。六月に現地説明会。入札、業者の選定。七月に契約手続の段階に至った。大口の支払資金が必要となる。

④栃尾教会　被災建物、設備等の補修工事は完了している。ただし、長期的な教会財政再建の課題が残っている。今後、教区と相談して対応したい。

⑤長岡教会　中越地震関連の補修は完了している。その後についても、訪問等の支援を感謝している。

(3)「中越沖地震」の報告

昨七月十六日柏崎を中心に発生した地震被害の様子を現地入りした飯塚統括主任から報告を受けた。現地の柏崎伝道所は倒壊は免れた。教区は同所に新潟地区の教師を中心にボランティアセンターを設置した。

(4)支援計画　十日町、見附両教会への送金を協議した。（樋田利明報）

事務局報

補教師登録

井上　創　池田季美枝（二〇〇七・四・二三受允）
清水明次（二〇〇七・四・三〇受允）
棚村恵子　外崎　孝
片岡宝子（二〇〇七・五・七受允）
隅野　徹　細田　隆
韓　守賢　大澤　求
浅田美由紀（二〇〇七・五・一三受允）
森田好和　山野里子（二〇〇七・五・一四受允）
北中晶子　陣内大蔵
原田譲治　望月麻生
大坪直史（二〇〇七・五・二七受允）
柏　明史　瀧澤雅洋
平澤基幸（二〇〇七・六・二三受允）
正教師登録
高橋眞衣子　高塚和彦（二〇〇七・四・三〇受按）
教師異動
札幌北光　就(担)清水明次
いずみ愛泉辞(代)浅見定雄
〃　就(主)布田秀治
泉高森　辞(主)清藤　淳
〃　就(代)望月　修
小高　辞(主)木村和基
〃　就(主)大下正人
燕　辞(主)橋原正彦
〃　就(代)上島一高
新島学園　辞(教)西村義臣
新潟愛泉　就(代)熊江秀一
松原　辞(担)上野和明
百人町　就(担)木村和基
日本基督教団　辞(教)竹前　昇
〃　就(教)内藤留幸
南久が原　就(主)細田　隆
小金井　辞(主)林原泰樹
向河原　就(主)平澤基幸
清水ヶ丘　就(担)柏　明史
伊豆長岡　就(代)長倉　勉
軽井沢　辞(代)吉田　弘
〃　就(主)西村義臣
小栗栖　就(代)井上勇一
大阪九條　就(代)大門義和
神崎川　就(担)橘高　聡
水上隣保館キリスト教社会福祉専門学校　就(教)春名康範
和歌山　就(主)清藤　淳
山手　就(担)楢木進一
神戸女学院辞(教)春名康範
鳥取　就(主)橋原正彦
高知中央　辞(代)野口幸生
〃　就(主)川添義和
土佐　辞(兼主)原　忠和
〃　就(主)成田信義
中村栄光　辞(代)野村和男
〃　就(主)末　永廣
福岡女学院辞(代)中川憲次
〃　就(主)多田玲一
若松　辞(主)多田玲一
那覇中央　辞(主)金城重明
〃　就(代)金城重明
教師隠退
中山洋一　岸本和世
石黒　満　山鹿昭明
山鹿文子　高野多太彦
野町佳郎　野村幸男
李　鍾光　八木康雄
大前幸正　中山月夫
椿憲一郎　椿　信子
福田　実　鳥山明子
三川　茂　三川のぞみ
井上良彦　西垣二一
安藤義雄　佐々木正実
伝道所所在地名変更
泉
木津川市加茂町里中森六七
伝道所廃止
明舞

訂正　第四六三四号第三面事務局報欄、教会合併「習志野・恩寵」「南房・津田沼」は未承認につき、お詫びして削除します。

Title: 新報4635号.ec7 Page: 4 Date: 2013/08/06 Tue 11:59:56

バングラデシュに『寺子屋』を贈ろう

ACEFのこれまでの歩みとこれからの課題

ACEF事務局長 中川英明

アジアキリスト教教育基金（ACEF）が発足したのは、一九九〇年のことでした。国連が定めた「国際識字年」にあたるこの年には「万人のための教育世界会議」が開かれ、「二〇〇〇年までに全ての人に教育を」を合言葉に、各国政府、国際機関、NGOなどが、基礎教育の普及と充実に取り組む決意を新たにしました。

ACEFは設立当初から二つの目的を掲げています。ひとつは「バングラデシュに寺子屋を贈ろう」で、アジアで最も貧しい国において、現地のキリスト教系NGOであるBDPと共働し、初等教育の普及に貢献しようということです。もうひとつは、この運動を通じて、アジアに使命と責任を持つキリスト者青年を育成しようということです。

バングラデシュのNGOであるBDPの創始者マラカール先生は、熱心なキリスト者で、イギリスで勉強した女医さんでしたが、農村地域での公衆衛生に関わる活動を行なう中で、講習会に集まってくる女性たち、若いお母さんたちが、熱心に話を聞くばかりで、誰もメモを取っていないことに気づきました。読み書きができないからです。資料を読むことも出来ず、自分の記憶だけに頼った実践では、衛生や健康の普及活動にも限界があると考えたマラカール先生は、医師を辞めて教育の普及に専念することを決意しました。彼女の呼びかけに応えて、日本で活動を始めたのが、隅谷三喜男先生と船戸良隆牧師を中心に発足したACEFです。

マラカール先生たちは、一九九〇年に、首都郊外のスラム地区に女子中学生を先生とする寺子屋幼稚園を十校開設し、幼児教育を始めました。校舎もなく、民家の軒先を借りて授業が行なわれましたが、一六三名の子どもたちが集まりました。これはまた、成績が優秀でも進学できず、十四～十五歳で結婚させられてしまう女子に奨学金を与え、学業を続けることを可能にし、女性の自立と地位向上を支援するための試みでもありました。現在でも、BDPの方針に従って、教師たちのほとんどは女性なのですが、このことは、子どもたちの教育と農村における女性の地位向上の両面において効果をあげています。

十七年後の二〇〇七年には、BDPが運営する寺子屋小学校は七三に増え、三〇〇名近くの先生方と共に一万二千人あまりの子どもたちが学んでいます。また、ACEFの個人会員は一九九〇年の七四名から一二〇〇名余りに増えました。

これまでの活動の成果としては、BDPの活動地域における子どもの就学率が大きく改善されたことが挙げられます。ただ、小学校に通う子どもは増えてきたものの、五年間の初等教育課程を終えて卒業できる子どもは、全体の半数ほどしかいません。多くの子どもが義務教育を修了することができるための支援を行なうことが新たな課題として浮上してきています。

一九九〇年にACEFとBDPがこの活動を始めたときに、もし「十七年間で七三の小学校を作り、一万二千人の子どもに教育の機会を与えよう」などという計画をたてようとしていたら、関係者はみな、そんなことは不可能だと尻込みをしたことでしょう。しかし、感謝しつつ、その時にできることを地道にやり続けてきたことがこのような実を結びました。イエスを中心にして、感謝して五つのパンと二匹のさかなをわけあって食べた群衆がみな満腹したように、イエスを中心にして活動を続けてきたら、いつの間にか奇跡が起きていた。そんな気がします。

寺子屋小学校の先生と子どもたち

隠退教師を支える運動

東北教区山形県推進座談会

高く晴れ上がった青空の下に、七夕の飾りが美しい七月七日（土）「隠退教師を支える運動」東北教区山形県推進座談会が、山形六日町教会で開催されました。

山形市役所前の道を渡ると目前に深緑の三角屋根に、淡緑の横羽目板を張った教会がありました。豊かな長い歴史を感じさせる佇まいは懐かしさと親しみに満ちていました。

遠く新庄・天童から四教会、山形市内からも二教会。加えて長谷川美子教区推進委員、櫻井淳子年金局業務室長、多田信一推進委員長、滝川英子書記の十七名が参加しました。

開会礼拝は、長谷川委員の司会により、柳谷明地区長がコリント二8章1節～7節から「その満ち満ちた喜びが極度の貧しさの中から溢れ出て、人に惜しまず施す豊かさは主の絶大な恵に応え、主の為に捧げる喜びを自ら喜びとしたのは、実に貧しさと試練の中に生きたマケドニア教会の信徒たちであった。そしてこのような献金の業に参加出来ることこそ神の恵みである」と説教されました。

午後は司会に滝川書記が立ち、参加者の自己紹介から委員長・業務室長の挨拶へと続きました。

発足二九年目を迎える信徒運動の歴史を共有し、運動のビジョンを唱和しました。

今年度から業務室長に就任された櫻井氏が初参加したことから、質問は教団年金の現状と将来に集中しました。室長は丁寧かつ的確に対応し新体制の理事会に信頼し期待して欲しいと説明しました。結果、年金制度を健全に維持する為にもこの運動を理解し協力することの大切さを参加者一同が理解して下さいました。

大切な土曜日をこの座談会の為にお捧げ頂いた五名の牧師先生と、熱心に協議に参加された八名の信徒の方々、細やかな心配りで会場を提供して下さった山形六日町教会に感謝します。

嬉しいことに早速参加された教会から、初穂が「隠退教師を支える運動」に献金されました。以上喜びと感謝を持ってご報告いたします。（滝川英子報）

ひとときの人

成松三千子さん

全国教会婦人会連合委員長に就任した

東京生まれ。柿ノ木坂教会員。07年6月、第20期全国教会婦人会連合中央委員会委員長に就任。

高齢化や若年層の空洞化はどこの教会でも直面している課題で、全国教会婦人会連合も例外ではない。成松さんによると「婦人会がなくなっている教会もある」という。その名が示すように教会婦人会の連合組織なのだが、教区によっては暫定的に個人としての加入を考慮せざるを得ない状況に立ち至っている。

「婦人会離れ」という言葉も耳にするようになった。成松さんは、その理由として「有職、趣味の多様化、介護」を上げ、教区、教団などへの関心が薄く、婦人会連合でも委員の成り手が少ない現状について、「自分の教会で満足している人が多いのではないか」と感じている。

婦人会連合に関わって二〇年になる成松さんは、「いろいろな集会、勉強会の場で他教会、他教区の人たちから多くの刺激、喜び、励ましを受けて来た。合同教会の難しさではなく、素晴らしさを知って欲しい」と願っている。

組織、財政の見直しを進める教団の中にあって、05年度から婦人会連合への教団交付金（04年度七〇万円）が打ち切りになった。その不足分を、「教会婦人」紙代値上げ、自主献金増額によって乗り切る対策を立てたが、06年度は自主献金増によって乗り切ることが出来た。

教団の状況を反映してか、九州、西中国教区が教区婦人会連合を解散し、離脱したまま修復出来ていない。「個人的にはコンタクトを取っている。いつの日か連帯出来ることを願っている。どの教会でも三分の二は女性。教会婦人がしっかりと連帯することが何よりも大切」と成松さんは持ち前の明るさでひるんでいない。

婦人会連合の基本姿勢の一つ、「個教会に仕え、全体教会に仕える」に加え、成松さんは「しなやかに、たおやかに、したたかに」を自らのモットーとして、さ来年の四〇周年記念事業、幕張メッセでの一七〇〇人全国集会に向かって準備を進めている。

ある牧師の生涯

六月に、ある温泉街の外れにある教会の礼拝に招かれた。

少し前の四月に伺ったのは、急逝された牧師の前夜式で、当然ながら重苦しい雰囲気であったが、それらのことは完全ではないにしろ、相当乗り越えられた様子。

婦人長老の司式で、奏楽はなく、ヒムプレヤーでの讃美歌で、この日の礼拝には十三名の出席（前年度平均は六名）。ある長老が「牧師が召されたので、自分たちで教会を守らねば、という思いになったのです…」と少し恥ずかしそうにおっしゃった。

召される直前の牧師が、教区総会資料の教会現状報告で「数える指が痛むような少人数の教会だが、熱心に聖書に取り組み、読後感想を語る姿に年齢の影は消える。高齢者二名が召天したが、とられた主の御旨に委ねて摂理に頼むほかはない。教会は、農村の中の温泉街という厳しい状況に、なお立ち続けている」と記しておられる。

この牧師は、神学校を卒業後、この教会に赴任されて十七年。自分の仕える教会を「数える指が痛む…」と文学的な表現で表されたが、そのような厳しい状況の故か、十七年の伝道者の歩みの中で、一度も洗礼式を執行することなく召されていった…。

遺わされた教会の地域や環境等で、牧師の活動内容が様々になるのはやむを得ない。それにしても召命に応え続けることは、本当に困難なことであったと思わざるを得ない。

（教団総会副議長 小林 眞）